

公務員の使命とは何か —私が「地域に飛び出す公務員」となるまでの軌跡

大橋志帆

はじめに

私の職業は地方公務員である。私は昨年、勤続 20 年の表彰を受けた。1993 年に社会人の仲間入りをした時、勤続 20 年を当面の目標にした。私がこの目標を達成できたのは、自分の努力だけではない。周囲で私を応援し、支えてくれた人達のおかげである。

20 年の節目を迎えた時、私は大きな喜びを感じるとともに、果たしてあと何年働き続けることができるだろうかと考えた。働くということは、自分にとって、とても大きな意味がある。

20 年を振り返ってみると、働くことを通して学んだこと、組織の中で悩み、迷い、それを乗り越えてきた過程、新たに見出した目標がある。今ここで、自分が歩んできた道を記録しておきたい。そして、これからの働き方や生き方について考えていきたい。

第 1 章 公務員になった私 —組織の中での悩みと成長

第 1 節 共働き家庭に育って

私の両親は共働きだった。私が保育園の頃、父は運送会社に勤務していた。今思うと、変則勤務やトラックの長距離運転などで大変だったようだが、仕事に対する不満などは口にしなかった。一方、母は工業用ミシンの内職をしていた。子どもの頃の私は、風邪を引きやすく、すぐに熱を出す体質で、保育園や小学校を休むことが多かった。そのため母は外に働きに出ることが難しかったと思われる。

私の成長に伴って、母はパートタイムの外勤に出るようになった。それ以降、私が出産して育児休業から復帰するまで、母はずっと働きに出ていた。周りの人達からは、「もう年齢もいっているのだから、そんなに無理して働かなくてもいいんじゃないの？」と言われていたそうだが、母は仕事を続けたい気持ちが強かった。母は時々、私にこう話した。「お母さんはね、なるべく長く働いていたいんだよ。働いていると、気持ちに張り合いがあるし、元気でいられるような気がするから」。最終的には、孫の世話をするために母は仕事を辞めたのだが、できることなら仕事は続けたかったようだ。

私は子どもの頃から働いている両親を見て育ったため、「男性は外で働いて、女性は家庭を守る」という固定観念はなかった。むしろ、男女関係なく働くのが当たり前で、自分もできるだけ長く働きたいと思うようになった。

第 2 節 職業選択にあたり

高校、大学に進学し、1992 年に就職活動の時期を迎えた。改めて、自分がどんな職業に就きたいのかを考えた時、まず私の頭に浮かんだのは、「出産や育児に関係なく、できるだけ長

★この続きは『2014 年度「日本女性学習財団賞」受賞レポート集 学びがひろく vol.4』で！